

## なにからどのように始めるか

香月 洋一郎  
KATSUKI Yoichiro

### I

「非文字資料の体系化」を考えていくことの中には、「文字資料」と「非文字資料」との関係性を探る作業が不可避に存在している。それは「実証」という言葉の問い直しへの道をつけることを意味している。そんなとんでもない大風呂敷を広げたプロジェクトに関る者として、では現実はどこからどのように動いていけばいいのか。

私達の班は「環境と景観の資料化と体系化」と銘うたれた作業でこのテーマに関ることになっている。つまり「環境」、「景観」という二語が、私達の班の作業のテーマの中に基本的なコンセプトとして位置している。と書いても、これだけではほとんど何も言っていないに等しい。この二つの言葉は各々それだけでは、あるものの漠然とした雰囲気を与えているにすぎないからである。

「環境」という言葉はどのように認識され伝えられてきたのだろうか。実はそこに関する知恵や技はそのまま諸々の民俗的伝承を指すことにもなる。たとえばそれが生産世界、生産作業を通じてのものであれば「生産伝承」という概念で括られてきたある体系を示している。

また逆に「環境問題」と語尾に一語を加えて表記してみると、これはすぐれて時代性、社会性を背負った問いとして人類の前に姿をあらわすものになる。漠然とした言葉が、一転して特定の状況を切実に示す色をおびることになる。「環境」という言葉を考えていくと、そのコンセプト性を云々する以前に、まず語の内包する間口の広さにたどりつく。

それよりもスケールは小さいかもしれないのだが、「景観」という言葉も類似の性格を濃厚にもっている。生産者にとっての景観とは、まずなによりも己の生産領域、生きてゆくための諸権利が反映した土地のありようを指す。そしてまた一方で為政者が統治の姿勢や力を誇示するためにつくりあげた景観もある。こうした要素は、あるいはないまぜになって、あるいは多元的な形をとって各々の内に潜む。

七、八反の耕地に鋤を打って暮らしている農民にとって、一里先の小高い丘に天守閣がつくられても、その生産領域内の認識自体にさほどの変化はない。しかし彼は野良仕事に精を出しつつ、日にいく度と顔をあげ、ふと天守閣を仰ぎ見ることになる。彼が旅に出たとしよう。その天守閣が見える地点にたどりつくと、彼は自分の世界に戻ってきたという認識をもつようになる。

腕利きの漁師は山あてで百を越す漁場を把握している。それは彼の感覚のなかにある海底地形である。網を曳く漁師であれば、その海底が藻場か泥か砂か石か、手応えで把握している。これらは地図的発想で表示される地形とは本質的に異なるものであろう。そうした人の体の中に五感をとおして

しみついた世界を「景観」という語の中に含ませるとすれば、それは環境という意味ときわめて近く  
なってくる。

## II

人の営為を時と社会とが成熟させ、たとえば権利として認知される。それは技が継承されることによ  
って洗練されて体系をもつに至るように、その権利を支える世界には、ひとつの次元が存在してい  
る。これは根底に核となるものを明確に含みつつも、きわめて柔軟な枠組みを持つ。元をたどれば同  
じひとつの五線譜の曲が、奏でる人間の解釈や感性によってまったく違う曲として耳に届くように。

だから何かの軸をもとにして、この二語のもつ意味を考えてゆかねばならない。それと同時にその  
軸を確立することで、この語のもつ広がりや深みを確定させ切るべきではない。この語をコンセプト  
に据える作業の可能性を掘りさげなければならないのだから。求めるのは結論ではなくアイデアの方  
向性であろう。



中央よりやや右よりに、逆くの字の形で川がみえる。川の上方は兩岸に船がならんでいて船だまりとしての機能をも  
っていることがわかる。この船だまりの右上の一角は、江戸時代前半に紀州から移り住んだと言われている魚民の集  
落になる。船だまりの川とほぼ平行して山すそに JR の線路が通り、この川と線路にはさまれて、それらと同方向に  
細い道が通っている。漁民の家はこの道の両側にならぶ。この集落の一角は住宅、工場、倉庫などに取り囲まれつく  
されても、定住当初の土地割りを伝え、周囲の地域とは異なる独自の空間性を保っていることが見てとれる。(広島  
県南東部、2002 年 12 月撮影)

対象を限定しないと方法を立ち上げることはできない。しかし問題の本質が関係性の中にこそ潜んでいる以上、限定するということは他を切りずてることではなく、中心を定めるということにすぎない。と書いてくるとこれまた多少の聞こえはいいのだが、姿勢としては半端というだけのところにいきつく。だからといってここでバランスをとろうとするとそれは逆に問いを見えにくくもする。私達の作業にはそんな厄介さが内在している。

そうした模索を、まず何よりも「現場」や「現実」を通して、そこにおける関係性の存在を求めることを主題にして、これから続けることになる。「現場」や「現実」に力点をおくのは、人の認識の象徴的な反映である画像資料を担当する班が別にあるからであり、関係性を重んじたいのは、環境認識の中で身体的技法を考えようとする強い志向軸をもった班が別にあるからである。

結局は心象風景の分析になるのではあろうが、切り口は生なまのものから入ってみたい。そうして再び生のものに戻ってきたい。それがとりあえずおぼろげながら考えている方向になる。もとより試行を変えていくのはやはり試行であり、作業を高め導く力は作業の中にしかない。手さぐりで道すじをつけてゆく一面を強くもつ動きである以上、前言は翻すためにもある。

コンセプトの曖昧さの指摘に始まった文章をさらに増幅してしまうような結びでおわるのだが、来年の今頃には私達の班は班としての一冊目の報告書を出すことになっている。まずはそこから始まる。

(事業推進担当者)